



[評者]
吉野 智博
津山中央病院循環器内科医
長

うし先生と学ぶ 「循環器×臨床推論」が 身につくケースカンファ

上原 拓樹 著
佐藤 宏行 監修

●B5 頁196 2025年3月
定価：5,500円(本体5,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05785-1] 医学書院刊



著者のうし先生(上原拓樹先生)は、非常に気さくで人間味にあふれていて、(臨床能力も含めて)バランス感覚に長けている人というイメージである。

今回の著書は以前うし先生が行っていた研修医の先生とのカンファレンスが基になっているとのことであるが、YouTube(@haraki0921)でもLive形式でカンファレンスを行われていた。私もそのLiveに参加する機会があったが、うし先生の診療の幅(もっと言えば循環器内科以外の診療科の知識)に驚嘆したものである。

私は現在、市中病院で循環器内科医として働いているものの、恥ずかしながら普段の診療はうし先生のように多面的な視点で考えられていなかった。本書を通読することにより、うし先生の臨床においてのバランス感覚を感じることができ、ともすれば「これは循環器」、「これは循環器ではない(から自分が診る疾患ではない)」と割り切ってしまうがちな普段の診療を見直すきっかけとなった。

さらにうし先生の素晴らしいところは、経験した各症例をCase reportにつなげている点だろう。ただ、うし先生のもとに珍しい症例が多く集まっているというよりは、私たちが普段見過ごしてしまっている点に

気付く姿勢や、さらにそれを深掘りしていくという熱意が、このような業績につながっているのではないだろうか。

本書のなかでいえば、特にACP(advance care planning)についてのCase(Case9 心不全で通院中の腰痛—ACPはどうですか?)が秀逸と感じた。自分たちが関わることで一見うまくマネジメントできたと思っていでも、実際にはなかなか思うようにいかないことは臨床で往々にしてみられる。「そうだよね、あるある」と共感しながら読み進めた。

最後に、私自身が考える本書の最も良い対象は、循環器内科専攻医や循環器以外の専攻医くらいの年次の先生である。自分自身もそうであったが、専攻医の頃にはいかに早く手技を身につけるか(PCI、アブレーション、デバイス留置、心嚢穿刺など)に心が向いていて、循環器総論としての疾患概念、また内科疾患の1つという多面的な視点が幾分おろそかになってしまう。そのような年次の先生にこそ、本書のような広い視野で日常の臨床を行うことの大切さを説く存在が必要ではないかと考える。

読者には本書を何度も“反芻”しながら、一緒に循環器医・内科医としての臨床スキルを高めていただきたいと願う。